

試行される討論

——国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」から「運命論者」へ——

渡 部 さくら

はじめに

国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」(明治三十四年十一月『小天地』第二卷第三号)は討論を描いた小説である。作中では岡本誠夫が、「明治倶楽部」にて上村らが談話していた輪に加わり、議題にあがっていた人生観について酒を飲みかわしながら談話する。そこで「理想」を馬鈴薯、「実際」を牛肉に例えて、「ビフテキに馬鈴薯は附属物だよ」「理想は則ち実際の附属物なんだ!」と説く上村らを否定すると、岡本は「不思議なる願」について話した。岡本のこの「願」は笑いによって流され、最後に岡本が「苦痛の色」を浮かべて終わる。本作は三人称の語り手であるが、語り手の存在は薄く、男たちの会話によってほとんどが構成されている。その中でも視点人物である岡本、最初に「理想」と「実際」を挙げた上村、主義的思想を否定した近藤の三人が主な会話の分岐点を生み出している。

本作の議題として取り上げられているような「思想」について

て、独歩は多数の作品を巡って思案してきた。「牛肉と馬鈴薯」以前の作品で見ると、「死」(明治三十一年六月十日『国民之友』第二十二卷第三百七十号)が代表的だろう。以降では、「日の出」(明治三十六年一月『教育界』第二卷第三号)「号外」(明治三十九年八月『新古文林』八月号)なども挙げられ、むしろ「牛肉と馬鈴薯」以降は盛んに討論が描かれている。ここで「牛肉と馬鈴薯」が特徴的なのは、多人数で議題について討論することである。複数人の登場人物が存在する作品は多くあるが、多人数で会話を交えたり、意見と応答を交錯させたりするものはほとんど無い。これは「牛肉と馬鈴薯」以降の作品でも同様のことが言えるのである。七人もの人数を用意し、意見を提示する者とりアクションを返す者で役割分担をさせたことで、「牛肉と馬鈴薯」はなにを表そうとしたのか。

先行研究では、主に独歩の思想に着目し、「喫驚したい^①」という問いを独歩が長く書いてきた自然観と絡めて捉えるものが多く見られる。その中心には常に自然が伴っており、作品群を総合的

に見ても自然豊かな土地で育った少年時代やツルゲーネフとの邂逅、煩悶の意識が蔓延する時代背景が元になっているとするものもある。独歩が多くの作品に渡って描く自然観は主軸を同じくしており、独歩が内包している自然観・思想を物語と共に描写することで、多様な方法で表現することを目的としているのではないだろうか。そのことを明らかにするためには、物語内容のみならず、その物語の構造や、後の作品にも継承された、または排除された要素にも着目する必要があるだろう。本論では以上のことを検討するために、後年に書かれた作品である「運命論者」との比較を行っていく。

「運命論者」（明治三十六年三月『山比古』）の舞台は冬が近づいている鎌倉である。「自分」は散歩の途中で砂山に窪地を見つけ、腰を下ろして読書を始めた。すると見知らぬ男が「自分」をじっと見つめている。不審に思い窪地を離れ、男の様子を伺っていると、男は窪地から酒を取り出して飲み始めた。観察していた「自分」に男——高橋信造は杯を渡し、「自分」に隠した酒の場所を暴かれたのではないかと自身の「運命」を呪ったという。そんな「運命」など言う不定形な力を信じない、と言う「自分」に、信造はなぜ「運命」を信じるようになったのか、その経緯を語り出す。育ててくれた両親は血のつながりがなく、実母は夫が没した後に幼少の信造を置いて逃げたこと。その実母は妻の母でもあり、妻となった人は異父兄妹であったこと。「過去の事実」を明かした信造に「自分」は離婚を勧めるが、信造は離婚をしても「過去の事実」は消えないと返す。二人は握手して、黙礼して別

れ、その後出会っていないという。

「運命論者」は語り手が「自分」と信造の二人であり、物語の大体は信造の語りとなっている。また、登場する人物がこの二人のみに限られているなど、「牛肉と馬鈴薯」とは異なる点が多い。だが、相対的な価値観を有する二人が意見を共有する点や、自己の主張を裏付けるために回想語riを行う点は類似しているだろう。関肇の論では作品の編成と意味作用について、「自分」と信造の会話や回想で語られた信造の「運命」について分析し、独歩が唱える「半面運命論者、半面事実論者」という価値基準が独歩の他作品でも包括して提示されていることを述べた。その上で「運命論者」はその基準を抱いた独歩の小説の多様性、その要である結論づけている。「運命」にも「事実」にも偏らないという規定は「運命論者」以前に発表された「牛肉と馬鈴薯」には見られないのだろうか。以下本稿では、二作品の物語全体の構造や場面設定などを比較検証し、両作品にて展開される意見の交差や人物たちが行う語りの意義を確認する。

尚、本文中の独歩の引用は『定本 国木田独歩全集 第二巻』（昭和三十九年 学習研究社）『定本 国木田独歩全集 第三巻』（昭和三十九年 学習研究社）に拠った。引用箇所の新漢字は改め、ルビは省略した。また、踊り字は適宜省略している。

I 物語の場面設定

まずは作品の時間や時期、場所等の場面設定にそれぞれ注目し

ていく。「運命論者」の冒頭から確認していく。

秋の中過、冬近くなると何れの海浜を問はず、大方は淋れて来る、鎌倉も其通りで、自分のやうに年中住んで居る者の外は、浜へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網の男、或は浜づたひに往通ふ行商を見るばかり、都人士らしい者の姿を見るは稀なのである。

冬前の鎌倉は寂れており、地域住民である「自分」は避暑地として賑わっていた夏の鎌倉から変化していく様子を肌で感じ取っている人物である。「自分」にとって日常の空間である場所で、「何時ものやうに」散歩をしていると、新たな発見をする。それが砂山の窪地であった。

窪地は「自分」にとって「真に心持の佳い場処」であり、「四囲寂然」とした空間でいつも通り読書をしているところに、高橋信造がやってくる。

然にふと物音の為たようであるから何心なく頭を上げる
と、自分から四五間離れた処に人が立て居たのである。何時
此処へ来て、何処から現はれたのか少も気がつかなかったの
で、恰も地の底から湧出たかのやうに思われ、自分は驚いて
能く見ると年輩は三十ばかり、面長の鼻の高い男、背はすら
りとした腹形、衣装といひ品といひ、一見して別荘に来て居
る人か、それとも旅宿を取って滞留して居る紳士と知れた。

彼はそこにつッ立って自分の方を凝と視て居る其眼つきを
見て自分は更に驚き且つ怪しんだ。敵を見る怒の眼か、それ
にしては力薄し。人を疑う猜疑の眼か、それにしては光鈍
し。ただ何心なく他を眺る眼にしては甚だ凄味を帯ぶ。

夏も終わり、旅行客も帰り、日常に戻ったはずの鎌倉で、「自分」の日常に侵入してきた高橋信造は、地元住民の「自分」にとって明らかに他所からやって来た存在として、視点人物の「自分」の眼によって描かれている。「砂山の窪地」を共有した後、終章までは周辺の描写がされないことから、語り手「自分」の意識によって閉鎖空間が作られることとなる。そんな場所に、「自分」の日常に突然現れた信造は、空間に非日常を生み出すキーパーソンである。

一方、「牛肉と馬鈴薯」では、岡本が日常に侵入する非日常の存在として登場している。

この明治倶楽部が未だ繁盛して居た頃のことである、或年の冬の夜、珍らしくも二階の食堂に燈火が点いて居て、時々高く笑ふ聲が外面に漏れて居た。元来この倶楽部は夜分人の集つて居ることは少ないので、ストーブの煙は平常も昼間ばかり立ちのぼつて居るのである。

然るに八時は先刻打つても人々は未だなか／＼散じさうな様子も見えない。(略)

すると一人の男、外套の襟を立て、中折帽を面深に被つた

のが、真暗な中からひょつくり現はれて、いきなり手荒く呼鈴を押した。

「珍らしく」食堂には明かりが点いているということは、岡本が明治倶楽部に来訪した時点でこの空間は通常とは異なる非日常性を帯びている。さらに「元来この倶楽部は夜分人の集つて居ることは少ない」というのに、岡本は夜八時に倶楽部を訪れている。外側からの侵入者である彼は「真暗な中からひょつくり」と突然登場した。その姿は「あたかも地の底から湧出たかのように」現れ日常に侵入してきた信造と重なる。

場面設定としてもう一つ上げられるのは〈語りの時間〉である。「牛肉と馬鈴薯」では冒頭に、語りの現在では「明治倶楽部」はもう無いことを明かし、岡本が倶楽部へ訪問した時点の倶楽部の復元が語り手のよって行われている。一方「運命論者」は、冒頭の様子では語りの現在に近く感じられるが、終章にて「其後自分は此男に遇ないのである。」と述べている。つまり、「自分」が信造と出会った鎌倉の晩秋は「自分」の回想であり、語りの現在でも信造を氣にかけているという時間の連続性をここから見ることができる。このように両作品は語り手によって過去が復元されたものだということがわかる。

Ⅱ 男たちの出会いと交流

次に作中人物たちの合流について見るため、再び「運命論者」に戻そう。日常へと侵入してきた信造に対し、「自分」は「妙な

奴だ」と思いながら凝視してくる信造を見つめ返す。ここで二人は互いに視線を交わし合うことで空間を共有し合っている、また他者として境界線を形成する。そうして「自分」が信造の目線に気圧され砂山の窪地から身を引くと、信造は「自分」から目的の居場所を取り返すことができた。こうして「自分」は信造によって外側に排斥されるが、「木蔭に枯草を敷て這いつくば」って信造を一方的な視線で観察しているため、空間の共有は未だ行われ続ける。その視線に気づいた信造は、出迎えるように「自分」に歩みよって来る。

取り出した物は大きな罎、彼は袂からハンケチを出して罎の砂を払ひ、更に小さな洋盃様のものを出して、罎の栓を抜や、一盃一盃、三四杯続けさまに飲んだが、罎を静かに下に置き、手に杯を持たまま、昂然と頭をあげて大空を眺めて居た。

そしてまた一杯飲んだ。そして端なく眼を自分の方へ転じたと思ふと、洋杯を手にしたまま自分の方へ大股で歩いて来る、其歩武の氣力ある様は以前の様子と全然違つて居た。
(略)

「如何でしょう、一つ僕の杯を受けて下さいませんか。」

「酒ですか、酒なら僕は飲まないほうが可いのです。」

「飲まないほうが！ 飲まないほうが！ 無論さうです。もう飲まないで済むのなら、僕とても飲まないほうが可いのです。けれども僕は飲のです。それが僕の秘密なんです。如何

でしよう、僕と貴様とこうやって話をするのも何かの運命です、怪しい運命ですから、不思議な縁ですから一つ僕の秘密の杯を受けて下さいませんか。え、如何でせう、受けて下さいませんか。」といふ言葉の節々、其声音、其眼元、其顔色は実に大なる秘密、痛い秘密を包んで居るやうに思はれた。

「よろしゅう御座います、それでは一つ頂きましょう。」と自分の答ふるや直ぐ彼は先に立て元の場合へと引返へすので、自分もその後に従った。

こうして信造は「自分」を内側へと招き、酒の入った杯を持って砂山の窪地を物理的な共有の場とする。他者の境界線を形成し、お互いを異質な存在だとした意識から、杯を交わすという『儀礼行為』を経て、二人は対等性を得る。このプロセスを踏むことで内輪を形成・介入することは、「牛肉と馬鈴薯」でも行われていた。

導かれて二階へ上ると、暖炉を熾に燃えて居たので、ムツとする程温かい。暖炉の前には三人、他の三人は少し離れて椅子に寄つて居る。傍の卓子にはウキスキーの壺が上て居てこつぷの飲み干したるものあり、注いだままのものあり、人々はいか加減に酒が廻はつて居たのである。

岡本は明治倶楽部に入った後、二階の食堂へ案内される。その

際、室内のテーブルには「ウキスキーの壺」が置いてあり、岡本が合流した男たちは既に酒によつて内輪を形成していることがわかる。その後竹内に出迎えられて唯一の知らぬ顔であった上村とあいさつを交わすが、岡本は挨拶も簡単に黙つてただ椅子に座るのであった。岡本にとつては異質な存在である上村を忌避するようにはじめは黙っていたが、「ウキスキーを一杯、下にも置かないで飲み干」すと、岡本は上村の人生観について興味を持つ様子を見せるのである。それは「自分」が差し出された杯を受け取り信造と秘密の共有をすることを選択したように、岡本もこのコミュニティに打ち解けることを選択したのだ。たまに上村の言葉にひっかかったり、意見を一つ交えたりしていたが、恋愛経験談を皮切りに岡本の酔いはすっかり回り、「不思議なる願」についての本題に入るころには「最早余程酔つて」いることとなる。こうして七人全員が共通の「ウキスキー」を飲むことで『儀礼行為』をし、互いに交流し合うことが可能になったのである。

こうしてコミュニティの輪が完成し、どちらの作品も本題へと入っていく。だが、一対一と一対多の場ではコミュニティの形の大きく変わるだろう。

Ⅲ 「運命論者」 信造の〈身の上話〉

両物語の本題となるのが〈身の上話〉と思想についてである。目の前に聞き手がいる状態で、どのように〈身の上話〉を行い、彼等は何のために語るのだろうか。

信造が行う〈身の上話〉は「原因結果の理法」によつて物事を

考える「自分」に対し「運命という人間の力以上の者」を信じざるを得なくなった経緯を話し、「不幸な運命」の信造を救う手立てを考えて欲しい、という目的が明示されている。そのため聞き手となる「自分」はそのことを念頭に置いて信造の話を傾聴することができるのである。信造もまた同様に、「運命」を基準に過去のエピソードを抽出し、全てが「運命」に帰属するような語り方を意識している。この聞き手「自分」への配慮は、例えば「父が『折角男に生れたのなら男らしくなれ、女のやうな男は育て甲斐がない』と愚痴めいた小言を言ふ、其言葉の中にも僕の怪しい運命の穂先が見えて居た」とあった際、「運命の穂先」が見えているのは当時の信造少年ではなく今の信造であることは容易に読むことができるだろう。過去の信造が多く受けてきた違和感や不運などは実は「運命」によるものであったのだと収斂させる語りをすることで、いかに「原因結果の理法」では説明の付けがたい事物があるのだと説得力を抱かせている。

先説法を用いた信造の語りを、聞き手「自分」は「一言を交へないで」聞いていた。本文でも三・六章の中に「自分」は一切登場しないことから、黙って真剣に信造の語りを聞いていたことが伺える。谷川恵一は、聞き手と語り手が「対一コミュニケーション」を成立させることは独歩の作品において「特権的な位置を占めて」と述べている。そして小説が印刷され大量に出回った時代背景や、読者がこれを密室で読むだろうという事情を表裏の関係にあると考え、「虚構の中の語りの場であると同時に現実の読書の場でもあるような」これを「二人の密室」とみなした。信造

と「自分」の関係もまたこれに当たり、さらに「自分」が信造の語りの中に影を見せないことで「自分」と読者は感覚を共有することになる。こうして「信造」「自分」と「信造―読者」の「二人の密室」は同時に成立するのである。そして信造は自身の〈身の上話〉を妨害なく終え、「若し此運命から僕を救ひ得る人があるなら、僕は謹しんで救を奉じます。」と締める。謂わば読者の代表として立てられた「自分」は、信造の求める様に傾聴に徹し、「運命」について考え、そうして解決策を提示する。しかし信造は「自分」の提案を受けることはしなかったのである。

「断然離婚なさつたら如何です。」

「それは新らしい事実を作るばかりです。既に在る事實は其為めに消えません。」

「けれど其は止を得ないでしょう。」

「だから運命です。離婚した処で生の母が父の仇である事實は消えません。離婚した処で妹を妻として愛する僕の愛は変わりません。人の力を以て過去の事実を消すことの出来ない限り、人は到底運命の力より脱ることは出来ないでせう。」

信造の否定は「運命」を根拠にしたものであり、「人間の力以上の者」と定義されたそれを否定するには、人間では到底無理なことである。「運命論者」である信造がそれに気づかないことはないだろう。ならば何故信造が〈身の上話〉をしたのかというと、解決策を導き出すためではなく、「原因結果の理法」を信じ

る「自分」とのやり取りの中で自己を確認するためではないか。

信造は「運命」を信じざるを得なくなった以前は、「自分」と同様に「原因結果の理法」を信じる者であつた。そもそも信造が「運命」に囚われるきっかけになつたのは、愛する妻が異父兄妹であり生みの母が実の父の仇であつたという惨酷な「冷かなる事実」に直面してしまつたためである。「運命」という「人間の力以上の者」、つまり不定形で原因も結果も説明つかない事物の影響なのだと思ふことで、信造は自身が狂気に陥るのをかろうじて回避している状態に落ち着いてしまつたのである。それまでの信造は、例えば高橋梅が怨霊のことで娘の里子に慟哭した際には「ちつと神経を痛めて居なさるやうだね」と冷静に見ていたり、怨霊の存在に惑う梅を見て精神を病んでしまつたのだと判断し鎌倉に療養させたりする様子が見られる。信造は怨霊などいう存在は信じている様子はなく、同じく怨霊を否定する里子と同様冷静に対応して、療養所として鎌倉を利用しようと近代人的な判断をしている点から、「自分」と同じような意識を持っていたことがわかる。〈身の上話〉をする前に「運命」の話聞いて欲しいと懇願するときには

「けれども僕は運命の怪しき力に惑ふて居る者ですから、其積で聴いて下さい。若し原因結果の理法と貴様が言ふならそれでも可う御座います。ただ其原因結果の発展が余りに人意識の外に出て居て、其為に一人の若い男が無限の苦悩に沈んで居る事実を貴様が知りましたら、それを僕が怪しき運命の力

と思ふのも無理の無いことだけは承知下さるだらうと思ひます、」

と前説をしている。以前は「原因結果の理法を信ずる」者であつたからこそ、同じような意識がある「自分」ならば伝わるだろうという信造の希望的観測と、「原因結果の理法を信ずる」者も「運命論者」に成り得るのだという例示が、信造の〈身の上話〉によって展開されているのである。

こうして「運命論者」では明確に〈身の上話〉行為について、丁寧に段階を踏み、聞き手に配慮した語りが行われていた。最終的に信造はかつての自身と同じ考え方を持つた他者に「不幸な運命」を語る事で、現在の自己を再確認することが出来た。「自分」の解決案に乗ることはなかったが、療養所としての鎌倉にこの日以降足を運んでいないことから、少なくとも信造は心身を病んで療養に帰つて来るといふことはなかったことが察せられるだろう。「運命」の魔の手から逃げるために砂山の窪地に隠したブランドーを飲む機会も無くなったとするならば、信造が鎌倉に戻ってきていないのは良いことだと考えても相違ないだろう。

このように信造の〈身の上話〉は自己の再確認を果たさせたが、岡本の〈身の上話〉はどうだろうか。

IV 「牛肉と馬鈴薯」岡本の〈身の上話〉

上村から始まつた人生論の話は、理想を牛肉、實際を馬鈴薯に例えたことでエスカレートする。上村は自分が實際主義になつた

経緯として北海道開拓に参加したが挫折し、貧困に苦しんで馬鈴薯ばかり食うくらいなら、都会生活で現実的に稼ぎ牛肉を喰う方が良いと結論づけた。だがこの「主義」という言い方を近藤が指摘する。原則的に實際を重んじることの頑固さに、柔軟性を含んだ「嗜きで牛肉を喰ふ」という表現を用いた。實際を嗜好する近藤に、岡本も同意する。だが岡本は實際も理想も選ぶことが出来ないと言うところから、岡本の〈身の上話〉が始まる。まずはその冒頭をあらためて見直す。

「君は何方なんです、牛と薯、エ、薯でしよう？」と上村は知った顔に岡本の説を誘ふた。

「僕も矢張、牛肉党に非ず、馬鈴薯党にあらずですなア、然し近藤君のやうに牛肉が嗜きとも決つて居ないんです。勿論例の主義といふ手製料理は大嫌ですが、さりとて肉とか薯とかいふ嗜好にも従ふことが出来ません。」

「それじゃア何だらう？」と井山が其尤もらしいしよぼしよぼ眼をぱちつかした。

「何でもありません、比喩は廃して露骨に申しますが、僕はこれぞといふ理想を奉ずることも出来ず、それならつて俗に和して肉欲を充して以て我生足れりとすることも出来ないのです、出来ないのです、為らないのではないので、実をいふと何方とも可いから決めて了つたらと思ふけれど何といふ因果が今以て唯つた一つ、不思議な願を持って居るから其ために何方とも得決めないで居ます。」

「何だね、其の不思議な願と言ふのは？」と近藤は例の墮しつけるやうな言振りで問ふた。

「一口には言へない。」

「まさか狼の丸焼で一杯飲みたいといふ洒落でもなからう？」

「まづ其様なことです。……実は僕、或少女に懸想したことがあります」と岡本は真面目で語り出した。

鷲崎秀一の論の中では作中に登場する洒落について解説されている。近藤が言つた「狼の丸焼き」とは「狼の黒焼き」のことを指しており、これは井原西鶴『日本永代蔵』巻二「才覚を笠に着る大黒」にある挿話から来ている。通りかかりに得た犬の死骸を狼の肉として売り大儲けした話であり、転じて「騙した金で楽しみたい」ということになるだろうと解説されている。この直前に近藤は外で待たせている車夫に博打用の金を貸してほしいと言われているため、その繋がりに出た洒落だろう。この〈身の上話〉の前説で岡本は、自身が理想も實際も決めることが「出来ない」と表現している。上村も近藤も経緯がある上で實際を選択しているため、岡本の「出来ない」は空間にいる誰よりも異質な空気を纏っている。加えて「比喩を廃して露骨に申しますが」と置くことよつて、これまで展開されていた牛肉、馬鈴薯のキーワードは完全に会話中から除外され、岡本自身の言葉のままに語ることを示している。酒に酔つて盛り上がったっている聴衆たちには絶大なる興味を引く語り口だろう。實際と理想を選択することが出来ない、それは「不思議な願」が原因である、と告げること

で聴衆は岡本が一体どのような願を持っているのかと聞く姿勢を取るのだ。

ではその〈身の上話〉の内容に入っていこう。岡本が懸想した少女は「お栄」といい、「パチリとはしないが物思に沈んでいるという気味があるこの眼に愛嬌を含めて凝然られるなら大概の鉄腸漢も軟化」するような美しい彼女のことを三度見て恋をした岡本は、彼女の家を訪ねた。両親は不在、女中と妹と三人で居たお栄は家の奥間でひとり歌を歌っていたという。「小妹は何故こんな世の中に生きて居るのか解らないのよ」と厭世的なお栄の言葉が「大哲学者の厭世論にも優つて真実らしく聞こえた」岡本は、お栄と結ばれていく。だがある日の夜、友人夫婦の洋行送別会での帰りに、お栄の母がお栄の出世間の傾向を嫌がるようなことを言う。お栄はそんな母の言葉を受けてか、岡本に「見捨ては不可ませんよ」と囁く顔は青白い。岡本はそんな悲愴な表情をする彼女から死の影を感じ取るのである。将来の生活の場を北海道に決めた二人は、まず岡本が資金集めのために実家の方へ帰った。しかし十日間の予定で帰ったはずが、トラブルが重なり二十日もかかってしまったところにお栄の母から電報が来て、帰京したときには少女は死んでしまっていた。「それで僕の総ての希望が悉く水の泡となってしまいました」と言うように、少女と描いた将来像、恋の楽しさや哀しさは全て少女の死によって消えてしまったのだという。

この途中に、岡本の話に言葉を挟んだのは綿貫、松木、近藤、井山、上村である。彼等の会話は岡本の恋愛を揶揄するように快

活に繰り広げられるが、その全てを岡本は払いのけたり、無視をしたりして全く相手にしない。会話という話題の流動性が激しい場所において、話題の変遷を認めず徹底的に一人語りに徹する様子は、言い換えるなら「運命論者」と最も近い箇所である。本文中でも「或難い謎をかけられ、それを解くと自分の運命の悲痛が悉く了解りでもするといったやうな心持がして」と悲壯的な表現で「運命」が使われている。だがこの「運命」を感じ取っているのは当時の岡本であり、結果的な「運命」を嘆いていた信造とはまた異なる質を帯びている。

ここで着目すべきは近藤の介入である。少女が死んだ結末を聞くやすぐに近藤は岡本の言葉を遮り、自身の男女恋愛論を「演説口調」で行う。

「ね、さうでしょう。どうです僕の説は穿つて居るでしょう。」

「一向に要領を得ない！」と松木が叫ぶだ。

「ハツ、ハツ、要領を得ない？、実は僕も余り要領を得て居ないのだ、ただ今のやうに言つて見たいので。どうです岡本君、だから僕は思ふんだ君が馬鈴薯党でもなく唯だ一の不思議なる願を持つて居るといふことは、死んだ少女に遇ひたいといふんでしょ。」

「否！」と一声叫けむで岡本は椅子を起つた。彼は最早余程酔つて居た。

「否と先づ一語を下して置きます。諸君にして若し僕の不思議なる願といふのを聴いて呉れるなら談しましょう。」

近藤なりに岡本の「不思議なる願」を解釈をしたが、岡本に「否!」と返され、さらに岡本は聞き手に徹することを要求して願について語り始める。近藤がここで介入することで、岡本の恋愛体験談が「不思議なる願」に直接的に関わっていることが一度否定されてしまったため、読者含む聞き手は岡本の真意をくみ取ることが一層難しくなる。だが決して岡本の恋愛体験が願と無関係とも言えない。岡本はお栄の喪失を大きく嘆き、悲しんだことははっきりと述べている。「少女の死は僕に取ての大打撃、殆ど全ての希望は破壊し去った」「僕は全然恋の奴隷であつたから彼女に死なれて僕の心は搔乱されてたことは非常であつた」その様子は「不思議なる願」と間接的にも関係があることは顕著である。重要なのは、なぜ恋愛体験を唐突にし始めたのか。

井上明芳はこの部分について、岡本が行っているのは会話ではなく「独白」だと指摘する。「不思議なる願」を「一口には言へない」ものだと置いて唐突に恋愛体験の話をしたのも、近藤の「欠伸」を用いた恋愛論にほとんど反応を示さなかったのも、岡本自らが言語領域をかたちづくりながら、意見が通ることを諦めている表れなのである。だからこそ近藤の言葉で言い直された願を拒否し、相手を聞き手以上には認めないのだと語る¹⁰。

これ以降、岡本は願についての説明を言葉を尽くして行いが、間に飛んで来る野次に岡本が応える様子は見られない。「運命論者」の信造とは異なり、岡本は何を目的として〈身の上話〉を行っているのか全く語らないまま、自分本位に話を続けていくことを止めないのである。その様子はまさに会話の放棄であり、聞

き手の存在を岡本が軽んじてしまっている。岡本の言葉は明治倶楽部の空間内で消え、聞き手に伝達されたかどうかの確認もしないまま、ついには「もう止しましょう!」と自身の意思で独白を中断するのである。聞き手への配慮を欠いた独白演説はやがて消失していき、「矢張り単にさう言ふだけですよ」と茶化してこれまで行ってきた自身の言説を誤魔化して終わる。独白の限界を感じて中断したのならば何故、聴衆の反応を見ることもなく、質問を投げかけるなどの討論に発展させなかったのか。それは、岡本がこの〈身の上話〉で得たかったことは聴衆の意見や同意ではなかったからである。

物語の序盤にて上村に「お書きになつた物は常に拝見して居ますので」と挨拶をされていることから、岡本は小説家やジャーナリストなど文筆に関わる仕事をしていることが伺える。このように岡本が言葉を重んじるキャラクターとして設定されているということは、言葉が受け手にあたえる重要性をよく理解しているだろう。つまり、岡本はここであえて目的を話さない選択をしたのである。聴衆の理解や同意よりも自身の口で発することで未言語領域にある「不思議なる願」の形を掴もうと模索し、「平気な人」を脱したいと考えたのだ。だが結果的に己の言葉に限界を感じ、「(What am I?)」という叫びは発せられなかった。

こうして語りの明確な目的やねらいを欠いた結果、岡本自身が言語化の限界を悟つたのだらう。ただし近藤のみが「岡本の顔に言ふ可からざる苦痛の色を見て取つた」のは、彼だけが岡本の求める様に聞き手に徹したことで意識的に「近藤—岡本」の「二人の

「密室」^①が生まれている。そして読者もまた、近藤以上に聞き役に徹していたため岡本の意図を理解しようとする無意識に働くのであるが、岡本が聞き手を放置してしまうため、読者も不理解を抱えながら、明治倶楽部に放置されてしまうのである。

おわりに

「牛肉と馬鈴薯」から一年と少しを経て書かれた「運命論者」では、前述のように人数や物語形式など大きく変更した部分が多く見られた。これは独歩が常に物語る方法の試行錯誤を図っている表れであろう。七人だった討論者が二人に減り、会話・独白体は物語の主題を明確に捉えられるようより洗練されたものになっている。聞き手の配置は変わらずとも、その属性はより明確化された。

「牛肉と馬鈴薯」で主な登場人物として置かれているのは上村と近藤である。二人は實際を重んじる人物として、岡本含む三つの思想を代表する人物として設置された。だが、会話体は常に偶然性を帯び、複数の思想が異なる人間が同時に存在することで新たな言葉の発生を促す。それによって「牛肉」「馬鈴薯」という比喩が生まれ、話題を支配していった。上村、近藤の言説は主義から嗜好へと漸次的移動を遂げていくことでより会話の進みを促していく。この「牛肉」「馬鈴薯」や「理想」「実際」など常に中心にあった言葉は、会話の偶然性の中に消え、岡本の「不思議なる願」の話題を最後に物語上から完全に姿を消してしまった。そして会話体までもが岡本により一時的に排斥され、明治倶楽部内

を「不思議なる願」が支配していく。この寸断は相手の論の否定と自身の論の展開という言説プロセスを踏んでいくが、継ぎ足して使われていった言葉が突如姿を消してしまうばかりで聞き手に戸惑いが残る。さらに岡本が矢継ぎ早に話を続けるので、話し手と聞き手の距離は一方的に話され、やがて関係は半壊してしまった。この聞き手には読者も含まれている。多くの先行研究が「不思議なる願」の解明に難航するのは、未言語の領域にある存在を無理矢理にも言語化を図ったことで起こった話し手と聞き手の乖離も要因として含まれるだろう。ただ、完全に岡本が聞き手に対して理解を拒んだのではないだろう。でなければもう一つの独白にあたる「岡本の手帳」(明治三十九年六月『中央公論』)は生まれない。岡本は独白の場所を閉鎖空間で複数人存在する前から手帳の中に変えたのである。岡本が独白を選択したことによって上村・近藤の言説も排除され、残ったのは主義も嗜好もなく「道楽」に落ち着き、行われてきた人生観考察は露と消えるのである。本来は意見を交錯する場であったはずなのに、言説の対称性も放棄されてしまったため、明治倶楽部での討論は空中分解して終わってしまうのだ。そして後に明治倶楽部は取り壊され、行われた会話も岡本の「不思議なる願」も完全に消失してしまう。

「運命論者」では述べた通り、「原因結果の理法」と「運命論者」の二対が用意されている。そして話し手と対になるように聞き手が用意されているため、話し手とは異なる視点を持つた前提で話し手の主張を読み取ることを強いられる。読み方の方向性を作品側から示すことで、話し手が一体何を語っているのかをより

分かりやすく見ることが可能となったのだ。また、作中の聞き手が「一言も交へない」おかげで、話し手は主題に添った形に過去を再構成して語ることができる。こうして「牛肉と馬鈴薯」以上に聞き手に配慮した物語が完成しているのである。

「牛肉と馬鈴薯」が行ったのは会話による言論の場の発生と、独白の限界の証明であった。だが近藤という聞き手の存在は岡本にとって大きなものだ。聞き手に徹することは、相手が話す言葉を万全に受け取る姿勢を取らせる。他者の言葉を不要としたのは、会話による言葉の発生が話者の思考を支配し主題が喪失しかねない。故に黙して聴く聞き手が必要であり、たった一人岡本の要求を守った近藤は岡本の未言語領域にある願を暗に読み取ることができた。これらは「運命論者」で信造が「自分」に聞くことを要求したこと、「自分」が言葉を挟まず聞き手に徹したことへと繋がっている。そのため信造は「自分」へ独白することで現在の自己を再確認し、「運命」からの逃れ場所である鎌倉から脱することができた。このように「牛肉と馬鈴薯」での試みが後の独歩作品に影響を与え、思想をさまざまな構造で語ることができるようになったのであり、そのような意味で本作は、独歩思想を物語に交え展開するための起点の作品であったのだ。

註

- (1) 滝藤満義「喫驚したいということ―「牛肉と馬鈴薯」論―」
(一九七八年『日本文学』)では「岡本の手帳」の方が先に書かれたことを文体や情調から指摘し、独歩は「驚異」をテ―

マとする作品への意欲を明治二十九年初頭頃からあったと述べている。

- (2) 伊藤淑人「国木田独歩の文章技法」(二〇一四年三月『東海学園大学研究紀要 人文科学研究編』)より。

- (3) 関肇「国木田独歩「運命論者」の世界―事実と運命の間―」(一九九二年『学習院大学文学部研究年報』)より。

- (4) 陰能成央「国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」論―〈復元〉と〈政治〉の諸相―」(二〇一六年九月『あいち国文』)より。

- (5) 注3に同じ

- (6) 谷川恵一「二人の部屋」(『歴史の文体 小説のすがた―明治期における言説の再構成』)より。

- (7) 注3に同じ

- (8) 鷺崎秀一「近代滑稽小説の系譜(二)―国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」―」(二〇一二年二月『稿本近代文学』)より。

- (9) 関肇「アイロニーの規制―国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」論―」(一九九八年十二月『光華女子大学研究紀要』)より。

- (10) 井上明芳「国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」論―独白を生成する会話体構造(特集 近代)―」(二〇一一年七・八月『解釈』)注6に同じ

(わたなべ・さくら 本学大学院修士課程)